

序 文

熊本大学の黒髪キャンパスは、白川の河岸段丘の上であり、縄文時代以来人々の生活の場所であった。その歴史ある土地にも、年ごとにキャンパス整備が進み、このたび情報ネットワーク館が新設されることになった。これに先立ち、熊本大学埋蔵文化財調査室によって予定敷地（約30×35m）を対象に発掘調査が行われ、興味深い考古学的結果が明らかになった。今回、その最終報告書を出版するに当たり、調査室の教職員はじめ所轄の施設部の職員諸氏の労を多とするものである。

掘り出された遺構と遺物は、縄文時代の土器や石器を含め、おもに8～9世紀の竪穴住居30軒、掘立柱建物2棟、溝6条などで、ここに奈良時代から平安時代にかけての集落が存在したことが明らかになった。過去の調査記録をあわせると、当時黒髪キャンパスの場所には、教育学部付近から工学部裏の白川の渡し場や駅を経て、熊本市国府の国府に至る官道が、南北に通っていたと推定されるので、今回の集落もおそらくそれに伴う一連の集落と考えられている。同じ黒髪北地区のくすのき会館地点（9407調査地点）で出土した、駅家を想起させる「馬」と刻書された土器や、土製の馬などの出土遺物も、これを裏付けているかのようである。

熊本大学は前身を旧制第五高等学校（五高）とするが、五高が創立された明治20年頃までは、黒髪キャンパス一帯は黒髪村と呼ばれ、その創立時の写真によると、周辺は一面の畑地であった。今回の発掘場所は、五高時代には東光原（とうこうげん）と呼ばれ、将来の校舎建設を見越して残していたと思われる場所で、学生たちが散策を楽しむような原っぱだったようである。新制大学になると、昭和40年代までは東光会館と呼ばれる木造平屋建ての学生用食堂だけが建っていた。現在、周囲には附属図書館や放送大学が新築され、そうした敷地の余裕もなくなってきた。

埋蔵文化財調査室は、校舎の新築工事を含めあらゆる工事に先立って、熊本大学の敷地に眠る考古遺物や遺構を調査することを任務としている。工事によって結果的に失われる遺構の記録保存と、出土遺物の整理や研究を行ない、その成果を出版物等によって広く市民や学界に情報公開する役割を担っている。今後学内の建物整備が行なわれると予想されるが、埋蔵文化財に対する関心が益々高まり、学内各機関、各位のご理解とご協力が得られるよう願う次第である。

平成19年3月1日

熊本大学埋蔵文化財調査委員会

委員長 伊藤 重剛